

いのちと地域を守る

生き抜く力育んで

「こども防災協会」設立1周年

災害発生後の72時間を生き抜く力を子どもたちに育んでほしい。仙台市の任意団体「こども防災協会」が設立1周年を迎え、活動を本格化させている。「防災キャンプ」「出張授業」「番組制作」のメニューを通じて判断力や行動力を身に付けてもらうこと、工夫を凝らす。

考える

「高学年まで風船を上げてみよう」。協会が5日、東京都港区スポーツセンターで初開催した日帰りキャンプ。都内の小学生約100人が指示された高さまで風船を飛ばし、津波の高さを体感してもらった。引き続き、参加者は水の入ったペットボトルをキャッチして水の衝撃を確かめる実験などを通じて、約9時間にわたって楽しみながら防災を学んだ。

工夫凝らし活動本格化

キャンプ・出張授業・番組制作

協会が昨年3月11日に設立された。代表は石巻市で被災地支援を続けるNPO法人ぐるぐる応援団代表の鹿島美織さん(41)。副代表は宮城県復興支援センター(仙台市)のセンター長茂木秀樹さん(42)が務め、約10人のボランティアが運営に携わっている。ほかに、プロボノと呼ばれる首都圏などの企業人が専門スキルを生かし、事業企画や広報などで活動を後押し。それぞれのイベントは留学生ら多くのボランティアに支えられている。



体感重視楽しさが契機に

こども防災協会の鹿島美織代表に、活動の原点や取り組みの目的を聞いた。

設立の目的は、「地震、津波、テロなどあらゆる災害から子どもたちに生き延びてほしい。石巻市で家族を失った遺族から多くの話を伺った。家や財産と違い、命は取り戻すことができない。震災7年を経過、動かしがたい事実として実感している」。

こども防災協会・鹿島美織代表に聞く



「子どもに教える」といって、子どもにも教えるべき点と工夫しているか。

「楽しい！」を入りに口にするでもらうことが大事。クイズ形式にしたり、国際交流と組み合わせたりしてメニューをつくってほしい。津波の高さは10メートルと伝えないで、子どもたちに「ここにかく逃げよう」と伝えたい」。

「個々の災害はそれぞれ異なり、いつどこで起こるかわからない対策は変わり、結局、ケース・バイ・ケースになってしまふ。それが防災教育の難しさだ。私たちができるのは防災を考へるきっかけを与えること。子どもたちは「ここにかく逃げよう」と伝えたい」。

伝える

2011.3.11



阿部貞男さん

自宅2階へ家族で避難 (石巻市)



震災が発生した時、同市西浜町の造船所内で、新造船の塗装の打ち合わせをしていました。突然、体験したことのない大きく長い揺れに襲われました。造船所の外に出ると、数日後に進水させた大型貨物船がゲートを突き破り、石巻港の内湾に進水して行き、造船所敷地内は、液化現象で湧き出た地下水が川のように流れていました。経営する工場や自宅が心配になり、すぐに車で帰宅

地域で訓練せず後悔



避難した自宅2階から撮影した津波の様子。約3.5mの高さの庭木がほぼ水没していた=2011年3月11日午後4時ごろ、石巻市中屋敷1丁目(阿部さん提供)

「津波が来た」と聞いていたが、どこか半信半疑でした。帰宅すると、妻(68)が家族5人が私の帰りを待っていていました。間もなく、自宅南側に立つ鉄塔に電線が激しく揺れ始めました。電線が切れて工場に落ちないか心配になり、南へ歩き出した瞬間、東から白い波しぶきが迫ってきました。「津波だ」と叫び、自宅へ引き返し、家族に向かって「2階へ駆け上がれ」と呼びました。全員の階へ上がり、ベランダから外を見ると、時速40キロ程度のスピードで流れきた水に流されていきました。水位が1階天井付近まで上昇し、「このまま階が水没したら死ぬか」と覚悟しました。夜になっても余震が続きました。震災の4年前から町内会役員をしていた阿部さんが、津波を想定した避難訓練を地域で行っていたにもかかわらず、その明かりで不安な一夜を過ごしました。

自然災害の情報発信

より多く知見公開を

自然災害の予知・予測への期待は大きい。だが、現状は大きな不確実性を伴った予測情報しか発信することができない。その不確実性は災害の種類によっても異なる。

久利 美和さん
東北大学災害科学国際研究所講師



久利 美和さん

998年に火山性地震が急増した。科学者は、最新技術だった干渉合成開口レーダー(SAR)によって、野・岐阜県境、今年1月の草津白根山(群馬県)で、突発的な水蒸気噴火は記憶に新しい。

観測体制が充実する核島(鹿児島県)でも2015年に群発地震が起き、住民が避難した。結果的に、マグマは地下約500mで停止し、噴火はしなかった。今後、多くの火山で観測体制を整えれば、地震も噴火も起きない可能性が高くなる。一方、異常が大きく情報が多ければ、大きな情報過多に悩まされる。一方、異常が大きく情報が多ければ、大きな情報過多に悩まされる。

火災警報器の普及 90%超

宮城県美里町婦人防火クラブ連合会長

佐々木文子さん (70) 「私たちの地域と家から火災を出さない」をモットーに、10年前から住宅用火災警報器の普及に努めています。



佐々木文子さん

活動を始めた当時、旧南郷町地区の普及率は約90%でしたが、旧小牛田町地区は70%程度。現在では町全体で90%を超えました。昨年1年間南郷町地区で建物火災がなく、地域の消防署から表彰も受けました。

地域防災 下地づくりに力

秋田市泉学区町内会連合会副会長

佐藤和雄さん (68) 毎年、地元の小中学生や高齢者ら約250人が炊き出しのほか、棒と毛布を活用した即席担架作りなどの防災訓練に取り組んでいます。



佐藤和雄さん

秋田県内は急速な高齢化が進み、介護が必要な高齢者の避難をどうするかは今後の大きな課題です。近隣住民は支援者に指定され、安否確認や搬送に当たる役割を担っています。

現場から